

新年が明けました。

元旦早々、大変なことになりました。能登半島でマグニチュード7.6（震度7）もの大地震が発生し、多数の方々が亡くなり、大規模な被害になりました。震源地近隣の志賀原子力発電所では放射性物質を含む水が多少床面に溢れ出たとのことでしたが、建物内にとどまり、幸い大きな被害は出なかったようです。まだまだ被害の全貌は見えていませんが、これ以上拡大しないことを願うばかりです。被災された皆様方には心よりお見舞い申し上げます。

弊社は創業してもう22年目になります。仕事での時間が早く経つのはなんとなくわかりますが、個人的な時間の方は歳を取ればゆっくり流れるものと思っていました。こちらも残念なことにそうはならないようです。あっという間に令和5年が過ぎ去ったような気がしています。昔は忙しい中でも、季節の変化にそれなりの「気づき」というものがあり、例えば春から初夏への移り変わり、あるいは晩秋から初冬への変化等にはそれなりに心に感じるものがありました。ところが、最近の気候変動により、季節の変わり目がなくなりつつあることで、昨年はいつまでも気温が高く、あっという間に冬になったように感じています（別の話ですが、日本近海で取れる魚の分布が様変わりしていて、海水温や海流の流れの変化により、魚がどんどん北上しています。これも残念なことに、季節感を狂わせています）。時の移り目がわからなくなってきていることが、私にとっての山あり谷ありの時間の流れを一直線に進行させてしまっているように思えてなりません。

さらにもっと大きな問題があるように感じます。昔の人々は、自分自身の感性を大切に、自然の中から湧き上がってくる季節折々の感情を和歌や俳句に込めて詠んできました。現在は、電子媒体を通じてのデジタル映像や音楽等が生活の中に充満して、我々を自然からどんどん遠ざけているように思えます。特に大都市での日々の生活においては、自然は消えつつあると言っても過言ではないでしょう。自然の景色の代わりにデジタルの映像が生活の中心に位置している今の状況で、もし携帯を取り上げてしまったら、ほとんどの方々は途方にくれ、「時間を過ごすということ」ができないのではないのでしょうか。デジタル社会がこれからも加速度的に進行することは避けようがなく、その結果日本人が過去長い年月にわたって持ち続けてきた独特の感性が失われてしまうのではないかと心配になります。「日本人とは何か」という問いは果たして今後は意味を持つのでしょうか。

AIの時代になりました。AI (artificial intelligence) は人工知能と訳されています。人為的に作られた知能ということでしょう。知能とは何かということは別として、AIは現代社会にますます浸透しています。過去の情報をどんどん蓄積し、整理、推論、計算等をアルゴリズム（手順）で処理して、結果を提示してくるAIの精度が高まれば高まるほど、我々には便利なツールになります。皆さんもご存知の「ChatGPT」がありますが、これはOpenAI（昨年末に経営陣によるドタバタ劇があった会社です）が2022年に公開した生成AI

のひとつです。生成 AI (Generative AI) は、蓄積されたデータやパターンを学習することで、新たなコンテンツを生成することができます。これを利用すれば、誰でも文章作成やコンテンツ制作が簡単にできるようになります。

2018 年に出版されたデヴィッド・グレーバー著の「ブルシット・ジョブ クソどうでもいい仕事の理論」が一時日本でも大変話題になりました。その本の中でどうでもいい仕事として槍玉にあげられたのが「管理職、事務職、コンサルタント、法務部門、人事広報、情報系部門等々」でしたが、まさにそのことが現実化してきそうです。生成 AI が進化すれば、今まで偉そうにしていた方々 (?) の仕事がなくなることで、仕事に対する評価基準がどんどん変化するのは間違いないでしょう。

とても便利な AI ですが、課題は二つあるように私は思います。ひとつ目は、蓄積されたデータの質と解析するアルゴリズムです。アルゴリズムはどんどん進化するので、ここでは対象外として、問題となるのは蓄積されたデータの真偽です。膨大なデータを収集することで、大数の法則より真の情報が得られることではあると思いますが、実際そうであるかは分かりません。蓄積されたデータに偏りがあれば、結果も偏りが出てきます。「(偏りのない) 蓄積されたデータが勝負」となれば、分野毎に優れた AI ができそうですね (余談ですが、会社毎に蓄積された情報が異なることにより、会社によっては生成された AI の付加価値が増大することになりそうです。優れた AI を持つ企業はその AI そのものを使ったビジネスモデルができることになりそうです)。

ほとんどのデジタル映像や文章が生成 AI を通じて作成されたものとなると、どういうことが起こるかということ、その映像や文章は果たして正しいのか? という疑問です。現在でも様々なフェイクな映像や文章が社会に溢れています。映像や文章がフェイクかどうかを確認する AI 技術も進化していますが、これではたちごっこです。これからの社会は、映像が流れたからと言ってその映像をそのまま信じていいというような単純なことにはなりませんし、また誰々が書いた文章だから素晴らしいとして、そのまま信じてしまうようなこともできないのです。では、我々は何を信用したらいいのでしょうか。

二つ目の課題は、判断基準をどこに定めるのかということです。テレビで流された映像や言葉がフェイクであった場合、それを見た、聞いた人々がそれらの情報を正しいと思ってしまうのは何に基づいているのでしょうか。昔から洗脳教育はあらゆる国々、組織で行われている可能性があります。洗脳教育によりある特定の判断基準を植え付けられてしまえば、それに基づいて人々は行動まで起こしてしまいます。ここで気づくのは、如何に家庭や学校の教育が重要であるかということです。三つ子の魂百までも、と言われるように、子供時代に洗脳教育 (そこまでいなくても偏向した教育) を受けた人がその偏向した考え方から脱却することは至難のことなのです。かくいう私自身は大丈夫かということ、別に洗脳教育や偏向教育を受けてきたことはありませんが、やはり間違った考え方をしていた、(或いは) している場合があるのではないかと危惧しています (例えば、男女平等、LGBTQ、生活保護等々)。つまり、何が正しいかという基準が不明確になった時代 (社会常識という

ものがどんどん変化していく時代)において、どうしたら確固たる判断基準を持って、AI社会で生きていくかということになります。本当に生きづらい時代になったものですね。

最後にちょっと話題を変えて、昨年10月に将棋の藤井七冠(当時)が王座戦第4局で運命を決めた一手という話をしたいと思います。相手は永瀬九段で、122手目の段階で将棋AIの評価は永瀬九段が圧倒的に有利として「99%」という数値を出していました。つまり、AIが99%永瀬九段の勝ちと言っていたのです。誰もが、これは永瀬九段の勝ちと思っていたというよりもむしろ、AIがそこまでいうのだから永瀬九段の勝ちは間違いないと信じたわけです。ところが、永瀬九段が123手目に、AI含めプロ棋士も想像もしていなかった奇手を指したのです。その結果、AIの評価は藤井七冠が有利という数値が90%にもなり、永瀬九段側は10%以下になってしまい、結果藤井七冠が勝ち、藤井八冠が誕生することになりました。何故、永瀬九段が勝ち筋の手ではなく、意外な手を指したのかということが話題になりました。AIが示す手を指していけば、多分永瀬九段は勝ったのでしょね(勿論、対戦中はAIが指している将棋は分かりませんが)。

楽観的な見方をするならば、偏向的な考えが植え付けられておらず、フェイク情報に基づいていない情報が全てベースになっているAIをうまく利用して生きていければ、幸せになれそうです。「誤るのは人の常」ということを踏まえて、正しいAI(これも定義が難しい!)を上手に活用して、豊かな社会づくりに取り組んでいきましょう。

それでは、引き続き倍旧のご厚情を賜りたく、お願い申し上げます。今年一年の皆様のご多幸を心よりお祈りいたします。

令和6年元旦

株式会社サイモンズ
代表取締役社長
齊川 満